

りゅう
竜 By: N.H

あなた りゅう こえ き
貴方は竜 の声を聴いたことがありますか。わたし にほん
てら りゅう こえ
聞きました。その寺の天井板 に長くて生き生きと真にせまっている 竜 がかいてありま
した。僧侶は説明していたとき、木魚を急 に叩いて、竜 の声を作りました。

りゅう そうぞうじょう くも お あめ よ どうぶつ
竜 は、想像上 のものでよく雲を起こし雨を呼ぶ動物だそうですが、どうやって人は
そのイメージが想像できて、声も模倣できるのでしょうか。私は、
よ なかほんとう
「世の中に、本当に
りゅう
竜 はいなかったのだろうか」という疑問を感じていました。

にしゅうかんまえ さいご りゅう かがくばんぐみ りゅう しんわ
二週間前に、「最後の竜」についての科学番組を見て、はじめて「竜は神話にしか
いかなかったのか」という疑問についての答えを得ました。

それは、ある科学者が雪山の氷の中で竜の死体をつつ見付けて、さらに研究のため
に、世界各地の竜についての伝説を調べ、その竜の生活を理解できるようになったとい
うものでした。その竜というのは「恐竜」のことです。からだ なが
きょうりゅう
は森林に住んでいて、蛇のような「恐竜」は川の中に住んでいました。雲を起こし雨
よ のうりよく のぞ すべ でんせつ りゅう きょうりゅう きこう か
を呼ぶ能力を除いて、全て伝説の竜のとおりです。けれども、恐竜は気候が変わった
ため、人間の出現前にもういなくなっていました。

では、どうして人間が竜のことを知っていたのでしょうか。

それは、その最後の竜のおかげなのです。最後の竜は“Mountain dragon”と科学者に
よ
呼ばれて、一生寒い雪山の洞穴に住んでいました。“Mountain dragon”は翼を持ってい

て、特別な消化系統で食べ物^{た もの}を水素^{すいそ}に転換^{てんかん}できたので、重い体^{おも からだ}でも、飛^とべました。それ
に、水素^{すいそ}を使^{つか}って火炎噴射^{かえんふんしゃ}もできました。

北欧^{ほくおう}には、昔^{むかし}、あるナイト（騎士^{きし}）が雪山^{ゆきやま}に竜^{りゅう}を探^{さが}しに行^いって、とうとう帰^{かえ}らなかつ
たという伝説^{でんせつ}についての絵^えがあります。それも事実^{じじつ}だと科学者^{かがくしゃ}は言^いいました。竜^{りゅう}が見^みつ
かつた同じ所^{おな ところ}に、人々^{ひとびと}の死体^{したい}もありました。その人^{ひと}たちが竜^{りゅう}のメスのこども^こを殺^{ころ}したの
で、悲^{かな}しく憤^{いきどお}った竜^{りゅう}に殺^{ころ}されたのだらうと学者^{がくしゃ}は推測^{すいそく}しました。その戦^{たたか}いのとき、竜^{りゅう}は
ひもじかつたので、火炎噴射^{かえんふんしゃ}できなかつたそうです。

その科学番組^{かがくばんぐみ}は研究^{けんきゅう}の過程^{かてい}を記録^{きろく}していました。私は、最後^{さいご}の竜^{りゅう}の生活^{せいかつ}が少しづつ
明^{あき}らかに示^{しめ}されていたとき、不思議^{ふしぎ}でしたが感動^{かんだう}しました。まるで、寒^{さむ}くて白^{しろ}い一^{いっ}色^{しょく}な

雪山^{ゆきやま}で“Mountain dragon”がゆったりと空^{そら}を浮遊^{ふゆう}していることが見^みえて、声^{こえ}が聞^きこえたよ
うな気^きがしました。